

英語と日本語における否定

平出 昌嗣

千葉大学教育学部

Negation in English and Japanese

HIRAIDE Shoji

Faculty of Education, Chiba University, Japan

「ない」とは、自然界に目に見える形であるものではなく、人間の意識と係わるもので、期待したものが見出されないことで認識される概念である。何かを求め、見つからないと、それが「ない」という意識になるが、その表現方法は英語と日本語ではかなり違う。文法的には日本語では否定語を必ず文末に置き、「～ではない」という形しかできないのに対し、英語は名詞否定、文否定、また肯定文で否定を表すなど、日本語ではできないさまざまな言い方ができ、まるでゲームのように否定表現を楽しむ感がある。ただし日本語は「ない」を使った形容詞は実にたくさんあり、「もつたない、くだらない、なさない、かもしれない、なければならない」のようによく使う。文化的には日本は和の文化で融和を求められ、相手に否定表現を使いにくいのに対し、西欧は個の文化だから自分の気持ちををはっきりと述べられることが背景にある。

キーワード：否定 (Negation), 英語 (English), 日本語 (Japanese), 文化 (Culture)

1. 「ある」と「ない」

「ない」とは、自然界に目に見える形であるものではなく、人間の意識と係わるもので、期待したものが見出されないことで認識される概念である。何かを求め、見つからないと、それが「ない」という意識になる。そこから否定は大きく二つに分かれ、一つは何かがない状態の認識、もう一つは行為や状態をないものにする、つまり否定する場合に用いられる。

まず「本がない」のように、状態を「主語 (名詞) + ない」で表すとき、この「ない」は形容詞で、「きれい」や「楽しい」などと同様、性質を表す (日本語では形容詞は終止形がイで終わる)。この場合、形容詞であるから、本が「ない」という性質をもってそこにあることを表す。「ない」が「ある」という言い方も変だが、これは「ない」という状態が認識の対象として浮かび上がっているということである。「ない」の主語となるのは名詞だけでなく、「そこに行くことは・ない」のように名詞相当語句も受ける。英語の場合、「本がない」に相当する表現は二つある。一つは There are no books で、no は形容詞であり、no という性質を持った本がある意、もう一つは There are not any books で、本があることを否定しており、not は文を否定する副詞になる。

否定のもう一つのタイプは「主語 + 述語 + ない」で、主語ではなく述語を否定する。日本語の述語には動詞と形容詞・形容動詞および「名詞 + 助動詞 (「だ」)」があるから、行為としての否定と、状態としての否定がある。どちらも期待がまずあり、その期待が裏切られる (行わ

れない) ことで認識される概念になる。形容詞の場合、「楽しい」はずという期待があり、それが裏切られて「楽しくない」となる。名詞の場合、「本」のはずという期待があり、それが裏切られて「本ではない」となる (「では」は、断定の助動詞「だ」の連用形「で」+ 強調の副助詞「は」)。動詞だと、「食べる」はずという期待される行為があり、それを否定して「食べない」となる。この場合、食べないかというまわりの期待があって「食べない」と言う場合と、おいしいかもしれないという自分の期待があって「食べない」という場合がある。一方は他人に対して言い、一方は自分に対して言うことになる。この「ない」という否定語は、文法的には、動詞を否定する場合は助動詞で、名詞 (+ 助動詞) や形容詞を否定する場合は補助形容詞になる。補助形容詞の時は高アクセントとなって強調され、また直前に副助詞の「は」を入れることができるが (「楽しくはない」)、助動詞の時はアクセントがつかず、「は」も入らない (食べない) (ただし「食べては (い) ない」のように接続助詞「て」を入れると可能)。この「食べない」に相当する英語は、I don't eat で、not は副詞として、I eat という文を否定している。「楽しくない」は I'm not happy で、やはり not は副詞として I'm happy という文を否定している。英語には否定を表す助動詞はないから、副詞で否定することになる。日本語の「ない」も副詞として統一したいところだが、一つには日本語の副詞の定義は活用のない自立語であるため、また一つには形容詞と助動詞の「ない」は語源が違くとされるため、先のような位置づけになる。

動詞の場合はそれに否定語をつけて命令形が作れ、相手に対して「それがある (それをする) 状態にするな」

連絡先著者：hiraide@faculty.chiba-u.jp

の意になる。これも、相手がそれをするという予測があって、それが起こらないようにする意になる。「食べるな」なら相手が食べようだという予測があって「食べるという行為をするな」の意、「食べないように」は「食べないという状態にせよ」の意になり、「せよ」の分だけ積極的な行為を促す。英語の場合、Don't make any replyとMake no replyは同じ意味だが、形の上では、前者は行為を否定し、後者は行為を促しておいて目的語を否定する形になる。

「ない」の反対概念は「ある」である。しかし品詞は、「ない」が形容詞なのに対し、「ある」は動詞である(動詞は終止形がウ段音で終わる品詞)。だから「ある」と「ない」は、暑いと寒いのような対の概念ではない¹。「ある」の語源として「なる(成る・生る)」があるが、「なる」とは生まれ出ることだから、その発想は英語のexistに近い。existは「ex-(外へ)+-sist(立つ)」で、「外に現れる」意になる。従って、「ある」とは生まれ出ていること、「ない」は生まれ出していないこととも言える。「ある」「ない」は、状態ではなく、行為として動詞化できる。「ある」は「あらわれる・あらわす」、「ない」は「なくなる・なくす」になる。英語では、「現れる」はappear(ap-pear ~に・見えてくる), emerge(e-merge 外へ・沈む), あるいはcome into beingで、なくなるはdisappear, be gone, あるいはannihilate(-nihilは無で、完全に無にするの意)になる。また「ない」を否定すると、「なくはない」(=ある)となる。「なくない」とは言わないが、口語の疑問文では「行きたくなくない?」のようには言う。ただしこの場合には二重否定の反語的疑問文になるので、「行きたくない」の意になる。「ある」の否定は、「あらない」とは言わず、「ありえない」「ありはしない」(ありゃせん)のように言う。文語では「あらず」「あらぬ疑い」のようになる。

なお、不在の場合の表現は、日本語では、人と物とで違って来る。人の場合は、「誰もいない」で、「い・ない」は「動詞(未然形)+助動詞」で、「いる」という動詞の打ち消しになる。物の場合は、「何もない」と言い、「ない」という形容詞をつける。文語の場合は、「訪ねる人なし」「父なし子」のように、人も物も「なし」を使った。逆も、「小僧あり」「父ありき」のように、人にも「あり」を使った。物と者は、どちらも「もの」と読むように、昔はそう大きな違いはなかったが、現代では区別するようになっていく(英語の関係代名詞も昔は人にもwhichがつけられた)。ただし「私には妻がある」「来客がある」「父がな(亡)くなる」と言う場合は人を所有・所属の観点で見ている。

2. 英語の否定

否定表現における英語の特徴は、日本語ではできないさまざまな言い方ができることである。それはまるで、ゲームのように、否定表現を楽しむ感がある。まず否定語には、形容詞・副詞・名詞として自由に使えるnoがあり、また文の否定に使われる副詞のnot, nay, never, nowhereがあり、また形容詞・代名詞・副詞のnor, neither, 代名詞のnone, nothing, nobody, 名詞のnaughtなど、〈n-〉で始まるさまざまな語がある。〈n-〉

で始まるのは、元が古代の否定語neで、それにさまざまな語がついて合成されたためである。例えばnoの元はnā = ne + ā (= ever), notはnaught (nought) /nɔ:t/ = nā+wiht (= thing), neverはne + æfre (= ever), noneはne + ān (= one)といったようになる²。またnotをどの位置に置くかによって、文全体を否定したり、特定の語や句や節だけを否定することもできる。nobodyのように否定語を文の主語にすることもできるし、seldom, rarely, hardly, scarcely, littleといった副詞を使うこともできる。それらの副詞は、意味の上では否定だが、文の形はnotが使われていないから肯定文でもあり、ただその肯定の度合いがきわめて少ないということを表している。例えばHe rarely goes thereは、「彼はまれにそこに行く」が文字通りの意味だが、日本語としては「彼はめったにそこには行かない」という否定的な訳し方になる。だから付加疑問をつけるときは~, does he? となり、否定文扱いになる。He is unkind to herは意味上は否定だが、形式上はnotがないので肯定文になり、付加疑問は~, isn't he? となる。「彼は不親切だ」も形の上では「~は~だ」という断定になる。onlyを使った文は、He has only three dollarsは「彼は3ドルしか持っていない」と否定的に訳すが、形は肯定文であり、「3ドルだけ持っている」が本来の意味になる(only = one + ly)。ただし、hardlyなどと違い肯定的にも訳せ、It costs only three dollarsは「たった3ドルだ」となる。barelyも肯定と否定の両方の意味があるが、「かろうじて」という肯定的な意味の方に傾く。

よく使われるのはnoとnotであり、noはnotよりも意味が強い。He is not a coward(, but he did nothing)は一般的、客観的な文否定で、彼が臆病者であることを否定しているだけだが、He is no coward(, as he fights against difficulties)は語り手の感情が強く入り、cowardを否定して、彼は決して臆病者ではない、むしろ勇敢だという暗示がある(短縮形ではHe isn't a cowardよりもHe's not a cowardの方が、notが明確な分だけ強意的になり、no cowardに近づく)。And hark! how blithe the throstle sings! He, too, is no mean preacher (Wordsworth, "The Tables Turned") (聴け! ツグミはなんと陽気に鳴くことか! 彼もまた決して凡庸な説教師ではない)もnoはmean(「劣る」意)を強く否定し、並外れて優れた説教師の意になる。あるいは、He has not less than ten childrenのnotは客観的な表現で、「10人よりも少ないことはない」、よって「少なくとも10人」となるのに対して、He has no less than ten childrenのnoは主観的な表現で驚きを表し、「10人以下ということは決してない」、よって「10人もの子供を」となり、数の多さを強調する。同様にJim is not less brave than Kenは単に事実を述べており、「ジムはケンと比べ、勇気が劣ることはない」、Jim is no less brave than Kenは語り手の驚きの感情が入り、「ジムはケンに劣らず勇気がある」となる。Father is (not / no) wiser than Motherの場合は、notはただ事実を述べて「~ということはない」意だが、noは強い感情が入って「~だなんてとんでもない」意で、父は母より愚かという暗示を含む。He is no longer richはHe is not rich any longerと

書き換えられるが、前者はlongerを否定、後者は文の否定で、noを使った方が否定の度合いが強くなる。There is no going backは、there isが存在を表す文だから、「going backが存在することは絶対にない」、だから「戻ることはできない」意になる。We cannot go backと同じ意だが、行為よりも行為の存在そのものに焦点を置いた言い方になる(notは次にaを求めるので不可)。次の文ではcannotを使うより意味が強まる。

I wished I could die. . . There was no going back. It was as if I had jumped into a well — into an everlasting deep hole . . . (Joseph Conrad, *Lord Jim*) (死にたかった……戻ることはできなかった。まるで井戸に飛び込んだようだった、どこまでも深く深い穴に……)

否定語の位置は、英語では文の最初の方に置いて、早いうちに文の方向付けを明確にする。I don't know himのように主語の直後に置くのが一般的だが、No one knows himのように主語にすることもできる。日本語では、「誰も彼を知らない」のように、文の最後に「ない」を置いて締めくくる(「誰も～ない」と呼応)。この語順は否定語に限らず、疑問文などにおいても、英語と日本語の大きな違いであった。ただし古英語ではI ne say (ic ne secge)の順で否定語を動詞の前に置いたが、neは1音節の弱アクセントのために聞き逃しやすいので、中英語で、強調のために強勢のあるnotを追加してI ne say notとなり、ついで弱い発音のneが消えてI say notとなり、ついで16世紀から助動詞doと結び付くことでI do not sayのように再び前に戻っている。その後、I don't sayという口語の短縮形ができ、疑問のときはDon't I say~?となるが、Do I not say~?となることもある。独仏語も同じ変化をたどるが、しかしdoに相当する助動詞がなく、否定語は後置のままである。フランス語だとIl ne chante pas(彼は歌わない)のようにne…pasで動詞をはさみ(会話ではpasだけもある)、ドイツ語はEr kommt heute nicht(He comes today not)のようにnichtを文末に置く。否定語が前に出てきたのは、文の方向付けを早めに示すという英語の強い精神のためであろう。ただし、You know him notとかHe had not a foreign accent, Dwell not upon the past!のように古い用法も見かける(notの位置は目的語の前か後)。特に詩ではthou (=you)などの古い用語とともによく使われる。

What thou art we know not; / What is most like thee? / From rainbow clouds there flow not / Drops so bright to see / As from thy presence showers a rain of melody. (Shelley, "To a Skylark") (汝が誰かだれも知らない。お前に一番近いものは何だろう。虹色の雲から舞う雨粒でさえ、お前から降り注ぐ歌の雨ほどまばゆくはない)

be動詞の場合はYou don't be a cowardとは言えず、doは使わずに、You are not a cowardのようにする。doが普通動詞からの派生であるためだが、命令形ときはDon't be a cowardとして一般動詞の型と合わせる。ただしBe not anxiousという言い方もある。否定疑問のときはAren't you ~?だが、Are you not ~?となるこ

ともある。Iのときは、amn'tという言い方がないため(方言にはある)、Am I not ~?となり、口語ではAren't (Ain't) I ~?となる。

否定語を前の方に出す文例をいくつか挙げる。

Very few of the sixpences I have given my son have found their way to the money box. (息子にやった六ペンスが貯金箱に入ることはほとんどなかった)

Nowhere have I received such a warm welcome from the city's residents.

(ここ以外で、市民からこれほど温かな歓迎を受けたことは今までない)

Not all of the story did she relate to me. (彼女は話をすべて語ったわけではなかった)(部分否定)

Under no circumstances should you tell a lie. (どんな時でも嘘をつくべきではない)

Not until the train was already moving did he bundle the animal into Beckthorpe's arms. (Evelyn Waugh, "On Guard")

(列車が動き出してからやっと彼はその動物をベックソープの腕に押し込んだ)

No sooner had I got off the ship than I was spoken to by a stranger.

(船を降りるや見知らぬ人に話しかけられた)

No matter how hard I tried, it was impossible to take off the bottle cap.

(どんなに頑張っても、びんのふたをはずすことは不可能だった)

口語でthink, suppose, seem, believe, imagine, expectのような推測を表す動詞がその後否定文(He will not succeed)を接続する場合は、その文の否定語を前の方に移し、本動詞の方を否定して、I don't think he will succeedのようにする。これは上記の一部の日常語に限定される特殊な使い方である。think自体が何かを強く主張する動詞ではなく、むしろ前置きとしてその主張を和らげる働きをするため、notがthinkの方に移ることで、否定が最初の方で示され、続く文は否定されるのだという心構えができると共に、従属節の中は肯定になるので、否定の強い響きが消え、全体として控えめな表現になる。I don't think that ~のように接続詞thatを使っても言えるが、thatは重い内容を導く形式的な語なので、話し言葉では基本的に省く。to不定詞を取る場合も同様で、She doesn't seem to noticeが口語調で、相手への配慮が働くのに対し、She seems not to noticeは文語調で、自分の意見を述べる感じになる。省略形でも、I think notよりはI don't think soの方が口語では一般的である。ただし、はっきりと断言する場合は、「I think + 否定文」として、否定文を押し出す。もっと語気を強めればinsist, claim, assertといった動詞を使い、続く従属節の中に否定語を入れる。発言に客観性がある場合はthatをつけ、その発言を浮き立たせる(日本語なら軽い「と」ではなく「ということ」の感覚になる)。hopeやwish, fearやbe afraidにも強い意思表示があるので、主張するときはやはり従属節内に否定語を入れ、I don't hope ~ではなく、I hope it won't ~とする。上

記以外の動詞では主語の意志が係わってくるので、not の位置によって意味が違ってしまいます。例えば I pretend not to know the answer は「答えを知らないふりをする」、I don't pretend to know the answer は「答えを知っていると言うつもりはない」となる。

過去に対する推測を表す助動詞 (may, will, must) の場合も同じである。She may not have been happy (彼女は幸せではなかったのかもしれない) のように、not は助動詞について may not で一つのまとまりを成すが、内容的には、She may have not been happy のように、not は may を否定しているのではなく、have been happy の方を否定している。しかし think の構文と同様、not は前に移動し、may にくっついている。He may not go away も、「立ち去らないかもしれない」という推測の意味では、not は go away を否定している (アクセントは may)。しかし、外から見た推測ではなく、その人 (主語) の意志や能力や義務を表す場合は、not はその助動詞を否定する。He may not go away も「彼は立ち去ってはならない」という不許可の意味では not は may を否定している (アクセントは not)。

日本語の場合は、「～ではないと思う」と言った方が自然な言い方になり、「～とは思わない」のように「ない」で文を言い切ると、相手の意見を強く否定したり、自分の意見を強調した言い方になる。「彼は来ないはずだ」と「彼が来るはずがない」も、前者はただの予測だが、後者のように「ない」を文末に置くと強い自己主張になる。

さらに英語では肯定文で否定を表現することもできる。その否定表現は直接否定ではなく、論理的に考えれば否定になるといった間接的な否定表現になる。

He would be the last man to betray us.

(彼は我々を裏切る最後の男になろう。→彼は決して我々を裏切らない。)

She is too old to climb that mountain.

(彼女はあの山に登るには年を取りすぎている。→とても年を取っているのだあの山には登れない)

The problem has yet to be solved.

(その問題はまだ解かれなければならない。→まだその問題を解いてない)

He is anything but a gentleman. (彼は紳士以外の何かだ。→彼は決して紳士ではない)

She is far from being innocent. (彼女は無邪気からはずっと遠い。→彼女は絶対に無邪気ではない)

He tried in vain to stop her. (彼はむなしく彼女を止めようとした→止めようとしたができなかった)

The beauty of the vase is beyond description. (その花瓶の美しさは記述を超えている→言葉では言い表せない)

I was past caring about what he thinks. (彼がどう考えるかをもう気かけなくなった)

The honour of our house must be kept above reproach. (Hearn, "Of a Promise Broken") (我が家の名誉が非難されないようにしなければならない)

He knows better than to judge by appearances. (外見で判断するようばかなことはしない)

He was as much a stranger to the stars as were

his innocent customers. (R. K. Narayan, "An Astrologer's Day") (彼は無知な客達と同様、星のことは何も知らなかった)

She dismisses his suggestion as beneath her consideration. (彼の提案を考慮に値しないものとして退けた)

God knows why he killed himself.

(神は彼がなぜ自殺したかを知っている。→彼がなぜ自殺したかを誰も知らない)

I'll be damned if I can jump like that. (William Saroyan, "One of Our Future Poets, You Might Say") (もしあんなふうに跳べたら地獄落ちだ。→絶対にあんなふうに跳ぶことはできない)

Keep off the grass. (芝生からは離れている。→芝生に入るな)

Freeze! Or I'll shoot! (凍れ! さもないと撃つ! →動くな! 動く撃つぞ!)

He looked around him wildly, as if the past were lurking here in the shadow of his house, just out of reach of his hand. (F. C. Fitzgerald, *The Great Gatsby*) (彼はあたりを荒々しく見回したが、それはまるで、過去がここ家の影の中、ちょっとだけ手の届かないところに潜んでいるかのようであった)

二重否定は、I am not unaware of his suffering (彼の苦しみに気づかないわけではなかった) のように、否定の否定は肯定ということで、肯定の意味になる。効果としては、直接言う場合と違い、遠まわしの、ためらう気持ちが出る (強調という逆効果もある)。ただし元々は、先の I ne say not のように否定の強調であり、Shakespeare でも I cannot go no further (*As You Like It*, II iv) (これ以上は歩けない) のように使われ、黒人英語や方言でも She never meant no harm (彼女には決して悪意はなかった) のように普通に使われている。日常語では、ないない尽くしの意で、I have no money, no friend, no hope, no nothing といった表現もある。時に三重否定もあるが、Why don't nobody never loosen up and let themselves go? (Dahl, "Butler") (どうして誰もくつろいで自由に振舞わないんだ) といた言い方は話し手の無教養ぶりを示すものになる。not (never) ... without doing の構文には否定が二つあるが、文字どおりには「～せずには～しない」、だから「～すれば必ず～する」という肯定文になる。You cannot be too careful (when you go abroad) も、「注意しすぎることはありえない」から、「注意しすぎてもよい」、「いくら注意してもしすぎることはない」となり、否定にもかかわらず、「～しなさい」と勧める意になる。日本語の二重否定も、「行かないわけではない」は行くかもしれないということである。「なくはない」とは「ある」ということ、しかし「ないものはない」と言えば、ないことの強調になる。ただし、文脈によって何でもあるの意味にもなる。

否定には全否定と部分否定とがある。He is never idle は He is idle という文を否定するが、He is not always idle のように副詞の前に not を置くと、not はその副詞を否定し、「いつも (必ずしも、まったく) ～と

いうわけではない」という部分否定になる (absolutely, necessarily, terribly, completely も同様)。not (very) much は「とても～ということはない」だから「あまり」と訳し、not a little, not a few は「少しだけ～ということはない」だから「少なからず、大いに」の意になる。ただし not a ~だと「一つもない」(There was not a sound upstairs) で、まったくないことになる。副詞でも certainly, apparently, fortunately などは文全体を修飾するので not の後ろには来ない (I don't know for certain は可)。一方で、always, everyone などは not を後に置くことができず、never や no one で言い換える。だから He always not complain ではなく He never complain になる。often は His speech is (not often / often not) clear の場合、not often は「よく～するわけではない」の部分否定で seldom と言い換えられ、often not は「～しないことがよくある」の全否定になる。all の場合、not all は部分否定だが、not ~all や all ~ not の語順では文脈によって全否定になることも部分否定になることもある。日本語の場合、部分否定は取り立ての助詞「は」がよく使われる。「全員が行かない」は全否定だが、「全員はいかない」は部分否定になる。「毎日(は)行かない」は、「は」がないと全否定、「は」があると部分否定で、よく行くけれど毎日ではないの意になる。修飾の仕方としては、全否定では「毎日」が「ない」に掛かるが、「毎日は」とすると、「は」によって「毎日」が焦点化されているので、それを「ない」が否定することになる。さらに「全員が東京には行かない」とすると、「全員が行かない」という全否定と、「全員が東京へ行くわけではない」という部分否定の場合があり、文脈に依存する。

副詞句・副詞節が not の後に来る場合、例えば I didn't leave her because I loved her だと、not がどの語に掛かるかで二つの意味が生じる。not が leave を否定する場合は「彼女を愛していたから別れなかった」となるが、not が because を否定する場合は「彼女を愛していたから別れたのではない(別れた理由は別にある)」となり、前者は別れない、後者は別れたことになる。どちらになるかは前後の文脈で意味が限定される。あいまいさを避けようとするなら、前者の場合はコンマを because の前に置く、後者の場合は not を because の直前に移すことで意味が限定される。同様に、I didn't betray my friend to get a profit も、文脈から切り離せば、「利益を得ようとして友を裏切るまねはしなかった」意と「友を裏切ったのは利益を得るためではなかった」意がありうる。後者の場合、not は本来は to の直前に置かれるべきだが、否定語はなるべく前へという心理から前に出てきた形になる。The brother is not clever like his sister の場合は、兄は妹ほど勉強ができない意と、妹と同様に勉強ができない意が生まれる。日本語でも「兄は妹のように勉強できない」には二つの意味があるが、「は」をつけ、「妹のように」だとすると前者に限定される。I helped Dorothy to turn a great picture, that leaned with its face towards the wall, and was not hung up as the others were (Gaskell, "The Old Nurse's Story") の場合は「その絵は正面を壁に向けて掛けてあり、ほかの絵の

ように(きちんと)掛けていなかった」で、主語の絵以外は、were の後に not はないから、ちゃんと部屋に掛けていたことになる。日本語の場合、「父は死んでいない」もあいまいで、死んでもうこの世にいない場合と、まだ死んでいない場合がある。「で」は、前者だと接続助詞「て」の転で、その後に読点をつけられるが、後者だと断定の助動詞「だ」の連用形になり、その後に読点はつけられない。後者は「死んでない」とも言えるが、この場合の「ない」は形容詞、「い・ない」だと助動詞になる。

英語の否定表現で、nobody や nothing ほど英語らしいものはない。無とはないものであり、自然界には存在しないが、しかし言葉の上では存在し、代名詞として、主語にもなれば目的語にもなる。Nobody knows what to do という文では、主語に当たる人物は、意味上では存在しないにもかかわらず、文法上では代名詞として存在を持ち、he と同様、単数形扱いで、動詞には -s をつける。これは数字の 0 の発想と同じで、0 は、実質的には存在しないものだが、数字の上では目に見えるものであり、りんごが 0 個あるという言い方もでき、 $5 - 5 = 0$ という数式も成り立つ。一方、日本語は、「ない」は形容詞として存在するものではあったが、しかし述語を構成することはできても、英語のように代名詞化し、主語にしたり目的語にしたりすることはできない。英語ほど論理的、数学的ではないということになろう。なお nobody も nothing も昔は no body のように 2 語で、それが 1 語になったものである。no one は人だが、それを縮めた none は物にも使う。

3. 日本語の否定

日本語では、否定表現はすべて否定語を文末に置き、「～ではない」という形になる(命令形の場合は「～するな」)。その点、単純で、英語のような多様な表現方法はない。ただし、文中に「決して、少しも、まったく、全然、とうてい、あまり、どうも、たいして、めったに、いっさい」のような副詞や「しか」という助詞、「間違っても、必ずしも、～だからといって」といった語句をつけると、その時点で否定が暗示される。だから「決してそのようなことは」で文を切って、否定を暗示することもある。「それはちょっと」「どうもねえ」「とてもとても」という言い方もできる(「とても」は本来は「ない」と続くものだった)。英語は not の位置が前方だから、こういうやり方はできない。また漢語には否定語として「不」、「非」、「無」、「未」があり、「不可能だ」、「非常識だ」、「皆無である」、「未定である」のようにも言える。あるいは囲碁から来た「駄目」という言葉もある。しかしそれらは名詞・形容動詞であり、述語を否定することはできない。「ない」しかないのである。

もっとも、古語に目を向けると、「なし」という形容詞のほか、「ず」「じ」「まじ」という否定の助動詞があった。「飛鳥川 淵は瀬になる 世なりとも 思ひそめてむ 人は忘れじ」(古今和歌集)では「じ」、「わが袖は潮干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね かわく間もなし」(万葉集)では「ぬ、ね、なし」と三つの否定語が使われている(「ぬ、ね」は「ず」の活用)。この形容詞

の「なし」は、「ない」という形で残っているが、助動詞の方は、「来・ず」の場合は「来ない」に変わり、「来・じ」や「行く・まじ」という打ち消し推量は「来ないだろう」、「行かないつもりだ」のように、一語ではなく数語に分ける分析的表現に変わった。「来ず」から「来ない」への変化は、「来ず」の連体形「来ぬ」が終止形となり、「ぬ」が衰退して、代わりに、上代・東国方言の助動詞「なふ」から派生した「ない」が接続して（あるいは形容詞「なし」の口語形が接続して）「来ない」となった。ただし西国方言では「ぬ」が残り、「来ぬ」「来ん」のように言う³。また「行くまい」の「まい」は「まじ」の口語形だが、「行くべからず」という言い方と同様、文語的な言い方になる。否定・過去の「なんだ」（知らなんだ）も関西ではその形で今でも使うが、関東では「なかった」になる。「なんだ」は「ぬ（打ち消しの助動詞「ず」より）+た（完了の助動詞「たり」より）」だが、「なかった」は「なかつ（形容詞・助動詞「ない」の連用形）+た（完了の助動詞）」になる。否定・丁寧は「ませんです」「ましない」「ないです」から「ません」（「ませ（丁寧の助動詞「ます」の未然形）+ん（否定の助動詞「ぬ」の転））、否定・過去・丁寧は「ませなんだ」「ませなんだ」から「ませんでした」へと変化している。従って古語の多様な表現は、丁寧語表現で使う「ん」を除き、現代口語では「ない」に単純化されたことになる。ただし古語でも連体形・連用形の慣用表現は今でもしばしば使われる。「あるまじき行い」「忘れじの街」「いかずじまい」「やむを得ず」「許せぬこと」「知らぬ間に」など、文語らしい歯切れのよさがある。「朝食を食べずに行く」「飽きもせずには眺める」は古風な言い方を残す関西の言い方で、関東では「食べないで」「飽きもしないで」になる⁴。

否定表現が、英語では多彩多様なのに、日本語では単純になるのは、否定表現が英語では好まれ、日本語ではあまり好まれないことを意味する。それは文化の問題として、否定表現に対する日本人と西欧人の気質の違いがある。西欧人は古代から個人主義の精神があり、相手がどうであろうと、自分の意志を明確に表明しようとする。イエス・ノーの選択に人間の自由意志があるから、ノーという言葉のためらわず、積極的に使える。一方、日本人は古代から和を貴ぶ精神があり、仲間や集団との調和を重んじるから、相手のノーに同調するノーは言えるものの、相手の意見に反対するノーはなかなか言えない。相手に向けて発するノーは、西欧ではボールのようなもので、当たってもそう痛くなく、こちらからもまた投げ返せばいいが、日本ではナイフのようなもので、相手を傷つけるから、なかなか投げつけられない。また投げつけられてもすぐには投げ返せない。特に相手が自分より上の者であれば、相手の要求なり勧誘なりを断ることは、相手の権威に逆らったり人格を否定することにもなるため、非常に難しいことになる。

日本語の否定表現は多様ではなく、ほとんど「ない」しかないのであるが、その分、「ない」を使った形容詞は実にたくさんある。日本語では「ない」がついても、英語では否定語なしで、一語で言えるものである。該当する英語を添えて例をあげると、もったいない (wasteful), はかない (fleeting), とんでもない (terrible),

途方もない (extraordinary), やるせない (miserable), つまらない (dull), くだらない (silly), なさけない (pitiful), みっともない (shameful), 味気ない (dreary), たわいない (silly), つたない (poor), つれない (cold), さりげない・なにげない (casual), かたじけない (thankful) などである。語源は、例えば「つまらない」は「詰まる」の否定形で、スカスカしていて貧弱で物足りないというさま、「くだらない」は「下る」の否定形で、元は「読み下せない」、つまりすらすらと読めない、筋が通らない、たいしたものではないの意、「もったいない」は「物体無い」で、本来の立派な形がなくなっていて惜しまれる、あるいは、そこまでしてこちらに恵んでくれてありがたい意を表す。「ない」で終わる形容詞の中には必ずしも否定の意味を含まず、強意の接尾語がついたものもあるが、その「ない」の用法は今では廃れているから、ほとんど区別がつかない。せつない (sad), きたない (dirty), あぶない (dangerous), だらしない (loose), せわしない (busy), あっけない (disappointing), はしたない (mean), えげつない (nasty), ごちない (awkward), 少ない (few) などが強意形である。

英語でこれに似たものとしては、形容詞に in- (il-, im-, ir-), un-, dis-, non- といった接頭語、あるいは -less という接尾語をつけて反意語を作る用法がある。un-, -less はアングロ・サクソン語、それ以外はラテン語由来であるから、日本語では非や不をつけて反意語を作る漢語の用法に相当する。inconvenient (不便な), impossible (不可能な), invisible (不可視の), disagreeable (不快な), unscientific (非科学的な), inhuman (非人間的な) のようになる。しかしながら、それらの語には必ず元の語があり、その語とは「肯定—否定」の関係が成り立つ。それに対して上記の日本語の形容詞の場合、その対立がなく、あっても廃れていて、否定の意味のない形容詞となっている。例えば「心ない」の反意語は「心ある」で意味を成すが、「つれない」(連れ無い) や「はかない」(果無い) の反意語として、「つれある」とか「はかある」とは言わない。

また「ない」を使った慣用句として、「～かもしれない」、「～なければいけない」、「～に違いない」がある。「～かもしれない」は、～かどうかは知ることができないの意、「～なければいけない」は、～しないとしたらよくないの意、「～に違いない」は、～に間違いはないの意になる。これは英語では may, must に相当するが、英語には否定の意はいっさい含まれていない。口語ではよく、「～かも」「～なければ」で切り、後は略して余韻を残す。「いけない」は「行けない」が元の意だが、それ自体で慣用句になっており、多義的である。「走ってはいけない」は禁止、「転んだらいけない」は用心、また「いけない子」は「悪い」の意になる（逆は「いける」で、「この酒はいける」のように「よい」の意。ただし文法的には動詞）。「いけない子」を「行けない子」と漢字で書くと「行く」意が出てしまうので、かな書きになる。また「～にすぎない」は「過ぎる」の否定形で、～を超えない、ただ～だけ、の意になる。さらに、相手に対する問いかけの場合も、「休まないか」「雨、降らないかしら」「これが正解じゃないかな」「お腹、空いてない?」「消しゴム、貸

してもらえませんか」「食べてもかまわないか」などと言う。これら「ない」を含む言い方は、「休もうか」「消しゴム、貸してもらえますか」「食べてもいいか」のような「ない」を含まない言い方が、そうすることを前提とした一方的で押し付けがましい響きになるのに対して、婉曲的で控えめな言い方になる。

また日本人がよく使う表現として、「しかたがない」「しようがない」「やむをえない」「どうしようもない」「するしかない」がある。英語の表現としてはcannot help ~ing (～せざるをえない) があるが (helpは「避ける」の意)、しかし英語の場合は、I cannot help laughingのように、自分の感情を抑えられないという意味でよく使われる。日本語としては「せずにはいられない」「思わず～してしまう」とも訳せるから、「しかたがない」という言い方とはずれる。これも文化と係わり、英語は自分を中心に物事を考えるが、日本人は社会生活でさまざまな義理に縛られ、なかなか自分の思うとおりには振る舞えないためであろう。自由に振る舞えなければ、諦めの表現を使わざるを得ない。

日本の社会では、上下関係で成り立つため、目上の者にノーと言うことはできないが、自分に対しては、謙譲の美德として推奨される。相手への贈り物をつまらない物ですが、とか、もてなす時に何もありませんと言ったり、自分を未熟者とか至らない者と言ったり、身内を、うちのろくでなしとか、あの役立たずと呼んだりする。手紙や公の席では、自分や家族にどんなに自信と誇りを持っていても、愚見、愚考、愚妻、愚息、愚弟などと呼ぶのが謙虚さの現れになる。愚息の代わりに豚児という呼び方もある。謝罪する場合は、「すみません」とか「申し訳ありません」と言うが(「～ません」は「ない」の丁寧な表現)、英語ではI'm sorryとかExcuse me、あるいはI beg your pardonで、そこに否定語は含まれない。謝罪の気持ちが強まれば、「おわびの言葉もございません」とか「わたしの力が及びませんでした」「弁解の余地もありません」と言って自分を否定する言葉をさらに強めることになる。謝罪どころか、感謝の気持ちを述べる場合でも、英語ではThank youなのに、日本語では、相手に苦勞や配慮をさせたことから、「すみません」とか「申し訳ありません」と言う。「ありがたい(有り難い)」「かたじけない」「もったいない」も感謝の言葉になる。和を貴ぶ社会では、へりくだり(語源は「減り下り)」の気持ちから、自分を否定する気持ちが強くなるのである。

その違いがはっきりと出るのが、否定の疑問文の答え方であろう。「行かないの?」という問いに対し、行くのであれば、「いいえ、行きます」と答え、行かないのであれば、「はい、行きません」と答える。これは「の」が確認の問いになっており、行くと思っていたけど行かないの? の意味になっているためである。だから、行く場合には、相手の疑いを打ち消して、そういうことはない、ちゃんと行きます、という意味で、いいえと答え、行かない場合には、相手の思っているとおりの気持ちを出して、はい、そのとおりで、と答える。英語ではAren't you going to the party?であり、行くのであればYesと答え、行かないのであればNoと答えて、イ

エス、ノーの答え方が日本語の場合と逆になる(ごくまれに日本語式の答え方も見かける)。これは英語では相手の気持ちに対して答えるのではなく、事実即して答えているからである。日本語は人を見て話し、英語は物を見て話すという心理の端的な表れになる。同じ否定表現でも、「行かないか」となると、また答え方が違ってくる。これは勧誘なので、行くのであれば「はい、行きます」、行かないのであれば「いいえ、行きません」となる。このように、相手の気持ちをどう読み取るかで、日本語では答え方が逆転してしまう。英語での勧誘は、Won't you come with me?であり、答え方は事実即した答え方になる。

この「はい」「いいえ」は感動詞(間投詞)である。否定は、平安時代までは「いな(否)」で、室町時代に「いや」に代わり、江戸時代からはさらに「いえ」「いいえ」が丁寧な表現として使われるようになった。しかし形容詞にも使われるnoと違い、あくまで感動詞であり、単独で使われ、文中の構成要素になることはない。肯定の場合は「はい」「ええ」が使われる。古語では「あ、ああ、あい」「えい」「や、やあ」「を、をい」などがある⁵。ぞんざいな言い方では「うん」とも言う。「うん」の逆は「ううん」になる。「うーん」と引き伸ばすと、返事をためらう言い方になる。「ええ」も「えー」と引き伸ばすと、やはり返事をためらい、引き伸ばす言い方になる。何かに感心するときは、「いや、これはいい」とも言えば、「うん、これはいい」とも言うが、「いや」と「うん」は本来は逆の意味である。「いや」を使うのは、そうではないように思っていたが、実際は、という気持ちであり、「うん」は、思っていたとおり、という気持ちになる。

「いいです」「けっこうです」という言い方もあいまいである。「ビールどうですか」と誘われ、「いいです」と答えれば、いらぬということ(No, thank you), 「いいですね」と答えれば、ほしいということ(Yes, please)になる。「いい」自体は「良い」(good)で意味が違うわけではないが、断るときの「いいです」は「(ビールは) いただかなくてもよい(かまわない・さしつかえない)」の前半部を省略した言い方になる。「お釣りはいいよ」は「お釣りをくれなくてもいい」、「その話はいい」は「その話はもうしなくてもいい」、「あなたはいいから黙っていなさい」は「あなたは話さなくてもいいから黙っていなさい」といった意味になる。こうした表現は、相手に伝えるものとして、「ビールはいりません」、「その話はしないでください」といった明確な否定表現よりは柔らかな響きになる。「いいかげん」もあいまいである。本来は良い加減で、「湯はいいかげんだ」のように言うが、マイナスの意もあり、「いいかげんな男」とは、良い加減を装ってズルをする無責任な男の意になる(この場合、形容動詞になり、アクセントが平板になる)。「いいかげんにしろ」は「いいかげんによせ」と同じ意味で、もう十分だからやめろの意になる(「～しろ」は、～したところで無意味だの暗示)。「適当」もプラスとマイナスの両意があるから、試験問題では「適当」は使わず、「適切な言葉を入れよ」のようになる。

4. 否定と文化

否定とは人間固有の思考法で、まず期待があり、それが見出されないときに使われる。人の期待を拒むとき、また自分の期待を捨てる時も同様である。だから初めから事実としてあるものではなく、人間が作り出す概念になる。否定は、行動としては、創造のための原動力として働く。何かを否定することで、それに代わる新しいものを作り出そうとするからである。

西欧の社会と歴史は大きく言って、否定によって発展してきたとも言える。空間的には、自分たちとは違う文化を否定することで領土を広げ、時間的には自分たちの前の文化を否定することでそれとは違う新しい文化を作り出してきた。だから否定は新しいものを作り出すための原動力と言ってもいい。創造的精神は、言語的発想としては、否定と、さらに仮定法によって作り出される。仮定法とは、現実はこちらだが、もし仮にそうではなく、こうであれば、このようになっていくのという発想であり、現実を否定して理想的な状態を作り出そうとする力を持つ。一方、日本は、他国とほとんど係わりを持たない孤立した島国であったため、歴史においても社会においても、その否定の力は西欧ほど大きくは働かなかった。むしろ日本では和の力が働き、否定の精神を、不和をもたらすものとして嫌う傾向があった。仮定法も現実否定を前提とするから、和の社会の中では好ましくない発想であった。個人の生き方においても、西欧は個人主義が根強く、支配しようとする相手に対してはノーと言って、みずからをしっかりと保持しようとする。しかし日本では、和の文化の中で、相手を否定したり自己を主張したりすることは抑えられる。ノーはむしろ自分に向かい、自己を抑えることが求められる。「見ざる聞かざる言わざる」という自己否定の精神が日本人の精神であり、それは例えばシーザーの *veni, vidi, vici* (来た、見た、勝った) という前進と肯定の精神とは逆になる。

歴史的には、西欧は、戦いを通して他民族・他国家を否定してそこを支配しようとし、自らは革命によって過去を否定し、新しい世界を作り出してきた。とりわけルネサンス、産業革命、イギリス革命、アメリカ独立革命、フランス革命、ロシア革命などは社会の土台や構造そのものを変革した。革命は *revolution* と言うが、「回転」というその語源が示すように、社会の土台そのものを引っくり返すことであった。一方、日本は、明治を迎えるまでは、戦いとは国内での日本人どうしの戦いであったし、政治でも、改革はあっても革命は起こらなかった。大化の改新、享保の改革、天保の改革などは *reform*、つまり改良であり、土台や構造はそのままに表現だけをよくすること、建武の新政、明治維新などは *restoration*、つまり回復であり、壊れかけたものを元に戻すことであった。このように日本では否定よりも肯定、変化よりも維持の力の方が強かった。国家の頂点には、象徴とはいえ、古代同様、今でも万世一系の天皇がいる。

文化的には、英語には牧畜文化の精神が浸透しており、ちょうど牧畜民がある土地に落ち着いても、その土地が不毛になれば、そこを否定し、放棄して、豊かな牧草地を求めて旅に出るように、否定を通して、肯定できる新しい世界を見出そうとする。一方、日本語の精神は稲作

文化の精神であり、大地にしっかりと根を下ろし、皆と力を合わせ、先祖から受け継いだ田地を守ろうとするように、ある状態を受け入れ、肯定して、それを維持しようとする。言語もそうした文化的土壌に咲き出した花になる。英語には他動詞が多く、日本語には自動詞が多いということも、目標を定め、前に進み出る発想と、安定の維持に価値を見る発想の違いになろう。また英語はノーに多様な表現があり、日本語には少ないことも、ノーを前進や変化をもたらすものとして肯定的に見る発想と、ノーを安定や秩序の破壊と否定的に見る発想の違いになろう。

最後に文学に現れた否定表現を見ておく。否定は思想的には無常観として現れる。代表的なのは中世の無常の文学。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。遠くの異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱忌、唐の禄山、これらは皆、旧主先皇の政にも従はず、楽しみを極め、諫めをも思ひ入れず、天下の乱れんことを悟らずして、民間の愁ふるところを知らざつしかば、久しからずして、亡じにし者どもなり。(『平家物語』)

否定語は、一段落目は「無、ず」で、春の夜の夢、風の前の塵といった比喩が無常観を強める。二段落目には「ず」が、「ざつ」(「ず」の連用形「ざり」の促音便)を含め、五回続く。さらに「ほろび」「亡じ」という言葉があり、おのずと否定的な雰囲気の色濃くなる。次も同じ無常の文学。否定語は「ず、なし」で、うたかた(泡の意)の比喩、「消え」という言葉が人生のはかなさを強める。

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。(『方丈記』)

どちらも人の世のはかなさを嘆くものだが、兼好法師が「世の定めなきこそいみじけれ」(『徒然草』第七段)(「いみじ」はすばらしい意)と言っているように、日本人はもともと、川の流れ、季節の変化、人生の移り変わりに対して、悲観的に見る一方で、それを肯定的に、時には美の現れとして見る感受性がある。とりわけ和歌で人生のはかなさを歌うとき、無常のさまに美を見たり、悲しみに心地よく酔う感覚がある。「花の色は移りにけりないたずらにわが身世にふるながめせしまに」(小野小町)、「たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし桜も移ろひにけり」(古今和歌集)、「手に結ぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にこそありけれ」(紀貫之)、「桜花咲きてむなしく散りにけり吉野の山はただ春の風」(源実朝)といった和歌から、俳句の「夏草や兵どもが夢の跡」(芭蕉)、また「昔の光いまいずこ」と歌う現代の「荒城の月」(土井晩翠詩、滝廉太郎曲)といった歌謡まで、空しさやはかなさに哀愁の美を見る心は一貫している。俳諧のワビやサビもわびしさや寂しさの美化であるが、その心とも通じている。

西欧の場合は、日本とは対照的に絶対の真理、永遠の美といった変わらぬものを求める感受性が強い。豊かさや華やかさが肯定的価値を持つ。永遠不滅のものは神に行き着くが、日本の神道では神々は自然から生まれ、自然の中に宿るのに対して、キリスト教では自然は神が創造したもので、神だけが絶対である。神の意志が歴史や社会、人間の宿命まで支配しているので、何かが崩壊するとき、そこには神に見捨てられたかのような絶望的な壊滅感が漂う。

Cordelia. Nothing, my lord.

Lear. Nothing!

Cordelia. Nothing.

Lear. Nothing will come of nothing: speak again.

Cordelia. Unhappy that I am, I cannot heave

My heart into my mouth: I love your majesty

According to my bond; nor more nor less.

(Shakespeare, *King Lear*, 1.1)

「申し上げることは何も」「何も!」「何も」「何もないところからは何も出てこない。もう一度言ってみる」「不幸なことに、私は心の思いを口にすることができません。親子の絆のままにお父様を愛しております。それ以上でもなく、それ以下でもなく」

この7行の会話に、nothing, un-, not, norが9個も散りばめられている。王国や家族の崩壊の物語が始まる前に、すでに言葉の上から否定の空気が濃厚である。この劇の終わりを締めくくるリアの叫びは、And my poor fool is hang'd! No, no, no life! / Why should a dog, a horse, a rat, have life, / And thou no breath at all? Thou'lt come no more, / Never, never, never, never, never! (5. 3) (娘はかわいそうに殺されてしまった! ない、ない、命がないのだ! 犬も、馬も、鼠も生きているのに、なぜお前は息をしてない。もう帰ってくることはないのだ、ない、ない、ない、ない、絶対に!) で、4行の間に否定語が10個も連続する。この劇はNothingに始まり、Neverで終わると言ってもよく、どんなに立派なものもすべて崩壊し、無に帰していくという絶望的な無常観が色濃く出ている。

現代演劇ではベケットの『ゴドーを待ちながら』が虚無感に満ちている。We wait. We are bored. . . In an instant all will vanish and we'll be alone, once more, in the midst of nothingness! (act 2) (おれ達は待っている。退屈している……一瞬ですべては消え去り、おれ達は再び、虚無のど真ん中で独りぼっちになるんだ) のように、神を失った現代で人生の根底にnothingnessを見ており、その中で来るはずもない救いを待ち続ける人間の生の空しさを描いている。

注

- 古語では「ある」は「あり」であり、言い切りの語尾がイ段音で、「聞く」「見る」「与ふ」などウ段音で終わるほかの動詞とは異なる。イ段音は「深し」「美し」のように形容詞の語尾であるから、「あり」は動作を表す動詞よりも状態を表す形容詞に近いことになる。しかし存在するものは時間とともに変化することから、動詞としての性格を帯びるようになった。ラ行変格活用は「あり・居(を)り・はべり・いますがり」の四語で、どれも存在を表すが、「居(を)り」(いるの意)には「居(ゐ)る」(座るの意)という上一段の動詞もある。
- 日本語の「ない」もローマ字にすればnaiで、noと同じ/n/音で始まるが、どちらも口を閉じたときの閉鎖音と否定の概念が感覚的に結び付くのであろう。他の言語では、ドイツ語はnein, nicht, ラテン語・フランス語はnon, スペイン語・イタリア語はno。ロシア語もH e rの表記でニェット(net)の読みになる(以上どれもインド・ヨーロッパ語)。韓国語はアニョで否(いな)のように/n/が入る。ただし中国語は不(bu), インドネシア語もbukanで唇を閉じて破裂させる/b/音。トルコ語はhayir, フィリピン語はhindiで声門で摩擦させる/h/音になるから、/n/は普遍的なものではない。
- 「ず」の連体形がザ行ではなくナ行の「ぬ」になるのは変に思われるが、「ず」は無変化の活用で、これとは別に上代に「な」の系列があり、これが「ぬ、ね」と活用し、「な、に」は消滅して「ず」に統合されたと考えられている。さらにそれに「ざり」(ず+あり)が統合され、「ず」は三系列から構成されている。
- 古語がすたれたといっても、昔からの文芸である俳句・和歌では、字数制限もあり、日常的な口語よりも格調ある文語の方が好まれる。例えば「たはむれに母を背負ひて/そのあまり軽きに泣きて/三步あゆまず」(石川啄木)、「燕はや帰りて山河音もなし」(加藤楸邨)の最後の句を「三步あゆまない」「音もない」としても、母音連続のために締まりがない印象を与える。
- 否定が口を閉じる/n/音を中心とするのに対して、肯定は口を開ける母音や半母音を中心とする。肯定は英語ではyes(イエス), yeah(イエー), ドイツ語でja(ヤー), フランス語でoui(ウイ)となる。他の言語では、トルコ語はevet, インドネシア語はya, フィリピン語はoo, 韓国語はイエ, あるいはネとなる。ただしスペイン語, イタリア語ではsi, 中国語では是(シー)の摩擦音, ロシア語はД a(発音はdaダー)の破裂音になる。